

静岡新聞 2023 年 9 月 6 日 付

東京大名誉教授(国際経済学)

伊藤 元重

円安の動きが止まらない。海外の主要国で金利が高止まりしている中で、日本の金利が低い水準にとどまっているため、グローバルなマネーの動きが円安の動きを強めている。円安が好ましいものであるのかどうかは、立場によって違おうだろう。自動車業界をはじめとする製造業では、海外で稼いだ収益を円に換算した金額が大きくなるので、円安によって収益が増大する。製造業の業績のよさが日本の株高の一要因であるが、円安の収益押し上げ効果の影響は大きい。

一方で、円安によるマイナスの影響も大きい。典型的な例が最近のガソリン価格だ。円安で海外から輸入する原油のコストが上がり、これがガソリン価格を押し上げている。ガソリンだけでなく、食料品や電力など、海外からの

論壇

為替レートの動き注視

輸入に依存している分野は、円安の影響を受けている。

そして何よりも、円安によって日本の購買力が大きく落ちていくことが問題だ。要するに日本は貧しくなっている。この貧しさを日常生活で実感することは少ないが、海外旅行に出かければ分かる。海外のすべてのものが高く感じるはずだ。ニューヨーク市の最低賃金が日本の大卒初任給の2倍にもなるように、日本の賃金が国際的にみても低水準になっていることにも、「安い日本」が見えてくる。

こうした中で多くの人が、この先為替レートがどのような動きを示すのか関心を持っている。現状のまま円安傾向を続けていくのか、それともどこかで為替レートの大規模な調整が起きるのか。為替レートの先の動きを予想することは難しい。将来の動きを予想することは諦めるとして、過去の為替レートの動きを参考にすることができるとは思えない。過去の動きの事例を二つあげよう。

一つは1985年前後の動きだ。この時期、米国での金利高騰の影響もあって、円ドルレートは240円前後であった。これを是正する意図もあって、プラザ合意として知られる主要国の介入政策でド

ルレートは一気にドル安に動いた。円ドルレートでは85年に240円前後であったものが3年後の88年には130円を切るような円高(ドル安)となっていた。急激な円高へのシフトである。

最近の経験で言えば、2021年の年初には110円前後であった円ドルレートが翌年22年の10月には150円を超える円安(ドル高)に動いた。それまでの10年ほどは110円前後で安定した時代が続いた後の動きである。この時の円ドルレートの動きは、急速なインフレでドル金利が急騰したことが原因と考えられる。

こうした過去の経験から学べることは、為替レートは通常は大きく変化することはないが、金利やインフレなどマクロ経済の大きな変化が起きた時にはかなりの規模の動きをすることもあるということだ。1980年代に経験した規模の動きがいま起きれば、1ドルが100円を切るような円高になるということもありうる。もちろん、そうした大規模な動きは滅多に起きることではない。ただ、今後の日米の金利の動きによっては、為替レートも大きく動く可能性があるので、想定しておく必要がある。